

も
く
じ

博物館と「郷愛」の像…P1 続 雪山久松こと久松八三郎…P3
北斎館が秀逸企画賞を受賞…P3 文化財防火デー 郷土博物館で消防演習…P4



【写真1】『祝 竣工記念 昭和61年10月27日 大谷田上区画整理組合』

足立史談

第697号

2026年3月15日
足立区立郷土博物館内
足立史談編集局
〒120-0001
東京都足立区大谷田5-20-1
TEL 03-3620-9393
FAX 03-5697-6562

博物館と「郷愛」の像

郷土博物館

さて、郷土博物館の建物とともに、四〇年を迎えたものに、正面駐車場脇に建てられた「郷愛」の像があるのをご存知ですか。農家の家族のブロンズ像です。郷土博物館が建設された博物館敷地と隣接する東湖江庭園敷地は、大谷田上（おおやたかみ）といわれた地域の区画整理の施行により、公共用地として提供された土地です。つまり郷土博物館の建設は、地域の区画整理事業と深く関連したもののなのです。奇しくもこのたび、「郷愛」の像に関わる資料をご寄贈いただきました。この像は、区画整理事業と、郷土博物館を結ぶ象徴なのです。今回は、郷土博物館を見守り続けてきた「郷愛」の像について紹介します。

「郷愛」の像の由来
「郷愛」の像は、大谷田上区画整理組合から郷土博物館（足立区）に寄贈されたもので、事業の竣工記念でもあります。像の制作者は、高橋剛（たかはしごう・本名 たけし）で、大正一〇年（一九二一）、山形県生まれ、東京美術学校（現、東京藝術大学）を卒業。東京家政大学の教授、金沢美術工芸大学の非常勤講師を務めました。日展等に作品を出展し、たびたび賞を受けました。高橋氏の作品は山形県の酒田市美術館にコレクションされています。現在の酒田市千代田に生まれ、生家は代々神社仏閣の木彫を仕事とする家だったということです。平成三年（一九九一）六月、逝去の三カ月前に故郷の芸術文化の振興のために彫刻作品の石膏原型一七八点が酒田市に寄贈されました。「郷愛」の像の制作が高橋氏に依頼された経緯は不明ですが、高橋氏の晩年の優作といえましょう。挨拶文と像に込めた思い
開館に先立ち一〇月二十七日、竣工記念碑除幕式並びに祝賀会が開かれました。「郷愛」の像のお披露目について、大谷田上土地区画整理組合による挨拶文があります。この地域一帯は、かつて東京府南

四〇周年を迎える郷土博物館
足立区立郷土博物館は、昭和六十一年（一九八六）十一月三日（文化の日）に開館しました。今年、博物館開館四〇周年になります。令和八年度事業では、四〇周年を記念してさまざまな展示を開催いたします。

この地域一帯は、かつて東京府南



【写真2】 式典での挨拶文を台紙に印刷した記念品のテレフォンカード



【写真3】 ミニチュアブロンズ像の「郷愛」
高さ36cm・横幅37cm・奥行15.5cm

とがうかがえます。いづれにしても、博物館の建設の前に、多くの方々の協力と郷土に対しての深い思いがあったことがうかがえます。

本像を制作する際の試作で造られたものをもとにしたために違うのか、あるいはこの形で新たに原型を起こしたものは不明ですが、像を建立した後に協力者に配られるものとして、手を広げた形が意外と親しみあるものになったのではないかと感じられました。

足立郡洲江村と呼ばれていました。東は中川、西は綾瀬川の清流に恵まれ、静かな田園風景が緑ゆたかにひらけていました。のどかな春には中川堤の桜並木が光まぶしく咲きほこり、みのりの秋には、黄金の稲穂が風になびいて、人々の心なごます美しい農村地帯でした。
やがて時移り、都市化の波が押し寄せてきて、このあたりも昭和四〇年ごろには農業がむすかしくなり、近代的な街づくりが必要となりました。

た。かくして昭和四十三年に土地画整理組合が設立され、都市計画の基に整然とした街がここに完成しました。
いま、この街に昔の面影は全く見られませんが、培われた心や古里の歴史を偲び、現在、そして未来を美しく生きていくために、恩賜賞・日本芸術院賞に輝やく高橋剛先生にお願いしてこの「郷愛」像を建て、足立区に寄贈しました。
昭和六十一年一〇吉日

像は、農家の家族が小さな子どもを指さす方向を見つめる様子を表現しています。
代々この土地を受け継ぎ耕してきた農家の人々が未来を見つめているような、挨拶文の内容と趣旨に添うデザインに感じられます。野良着や手に持つ鍬や鋤もこの地域で起耕に使われていたもので、具体的に細かい像容になっており、農業のくらしと祖先を大切に思う地元の人たちの気持ちうかがえます。そして、歴史と文化を後世に伝える郷土博物館に建つ像としてもふさわしいデザインです。

さてこちらの像は、ミニチュアブロンズ像としても制作され、関係者に配られたようです。博物館にも一点あり、図書室に飾ってありますが、このたびご寄贈の資料のなかに大谷田上土地区画整理組合理事長河合平内氏による手紙の形の「挨拶文」がありました。
挨拶文には、昨年の「郷愛」除幕式への出席を深く感謝し、高橋剛先生のご好意により記念にこの像を制作して送ることなどが記されています。
興味深いのは、子どもの手の形が本像とは異なる事です。ミニチュアアでは手を広げた形になっています。ミニチュア像の原型が、

地元の書家

続雪山久松こと久松八三郎

「足立史談」六九二号（令和七年十一月）で、紹介した雪山久松は慈眼寺（千住一―二一九）の「南北消防記念碑」を揮毫しています。この記念碑の脇にある「木遣」の碑について当号では雪山の筆とし、石碑に刻まれた年齢から久松八三郎を、安政元年（一八五四）くらいの生まれと紹介しました。しかし、これは木遣りを創った石山金五郎の年齢であり、誤りでしたので訂正いたします。そのため、久松氏の薬局が建物疎開にあたったときは、九十歳に及ぶような年齢ではなく、壮年であった可能性もあります。

木遣

そも安政の元年に
南北消防組を
四代五代睦まじく
つといあげた目出

千龍山へ

そも記念の碑を造る
ときの御うた

千代にても
契りし
今の代までも



「木遣り歌碑」の碑 銘はないが、書は雪山久松と思われる。

残りしとぞに

古新俗名

六十九翁
石山金五郎
大正十二癸亥年

「南北消防記念碑」の建立は大正十二年（一九二三）四月で、この木遣りの石碑も、共に建立されたものようです。石山金五郎は、木遣りの名人と言われた人物です。石山金五郎については、「南北消防記念碑」と併せて改めて紹介の機会を持ちたいと思います。

（郷土博物館学芸員 荻原ちとせ）

当館浮世絵を展示

北斎館が

第13回秀逸企画賞を

受賞しました！

昨年、当館所蔵の浮世絵を紹介する長野県小布施町・北斎館で開催された「知られざる秀逸コレクション 東京・足立区立郷土博物館所蔵浮世絵名品展」が、（一社）日本アート評価保存協会による秀逸企画を受賞され、二月十七日、その授賞式に当館職員も、出席しました。

この賞は、入館者数のランキングで評価されがちな展覧会を、観覧人数ではなく、質が高く開催趣旨がタイムリーで有意義な展覧会という視点で評価し、表彰するものです。

授賞理由は、「1200点に及ぶ浮世絵コレクションを初期から昭和まで四期に分けてその全貌の一端を示した展示である。浮世絵業界にあまり知られていないコレクションを

広く公開したことにより今後の注目が期待される」とのことです。（日本アート評価保存協会ホームページ 二月二〇日 <http://www.ja2pa.or.jp/syutsu-ikaku>）

小布施町は、「栗と北斎と花のまち」として知られ、人口一万人ほどの町ですが、年間百万人の観光客が訪れます。江戸の浮世絵師・葛飾北斎が八十三歳という高齢で初めて訪れ、たびたび滞在して祭り屋台の天井絵などの作品を遺しています。

来館者の浮世絵に対する興味も深く、五月二十四日から十月五日という長きにわたって、多くの来館者に当館と浮世絵を知っていただく機会となりました。実際に、北斎館でご覧になって、足立区の博物館はどんなところ？とご来館になった方もいらっしゃいました。



賞を受ける北斎館の理事長と副館長

文化財防火デー
郷土博物館で
消防演習を行いました
 郷土博物館



はしご車による救助と現場指揮本部 (手前)
 大隊長が全体の情報を集め指揮をとる

一月二十八日、足立消防署のご指導、ご協力により、「文化財防火デー」の防火運動の一環として消防演習を行いました。
 郷土博物館は、集客施設であるとともに貴重な文化財を後世に伝える保存のための施設でもあります。火災が発生した場合の動きをシミュレーションし、確認しておくことが大切です。
 今回の消防演習は、自衛消防隊(博



バスケット上の「一日署長」の指揮で一斉放水
 左側は足立消防団第一分団

物館職員)、足立消防団第一分団(地域の防災組織)、消防隊(ポンプ隊・はしご隊)が連携して行う大規模なものになりました。
火災の想定と演習手順
 郷土博物館二階給湯室から火災が発生し、初期消火と消防署への通報、来館者の避難誘導、そして文化財資料の運び出し、職員の避難といった流れになりました。逃げ遅れた人をはしご車で救出し、最後に駐車場から中庭方向に一斉放水が行われました。
自衛消防隊
 自衛消防隊には、消火班、通報班、避難誘導班などの役割に分かれ、火災報知機の作動とともに現場の確認、通報、初期消火を行います。同時に

来館者の避難誘導、文化財資料の搬出などを行います。
 到着した消防隊に、それまでの火災の現場状況や避難状況などをまとめて報告し、効果的な消火や救助ができるようにしておくことが肝心です。
はしご車の活躍
 はしご車は、高所活動の専門部隊が担当します。先端のバスケットに乗った隊員と操縦席で操作をする機関員はインターホンで会話ができ、細かな調整を行っています。博物館職員が「逃げ遅れた人」役になり、無事に救助されました。
現場指揮本部
 すべての情報が集められ、各現場活動隊に命令を発信するのは現場指揮本部です。変化する火災現場の状況を総合的に判断し、最も効果的に組織を動かす消防活動の要です。
ポンプ隊と消防団
 消火活動の最前線となるのが放水を行うポンプ隊です。ポンプ車は、道路に設けられた消火栓から水を汲み上げる吸水と、吐水口に接続したホースから放水する吐水の役割を行います。
 今回は消火栓から汲み上げた水をいったん簡易水槽に移し、その水を放水に使用しました。消防隊は、二

本のホースを分岐させ、消防団は、ポンプ車からのびるホースを使い三つの筒先で放水しました。
足立消防団第一分団
 消防団は一般区民で組織されています。第一分団は、佐野・大谷田・中川五丁目にあたります。当日は、大谷田の団員が参加しました。消防隊と連携し消火や救助活動にあたります。
 実際の火災に出動したことがありますか？とお尋ねしたところ「あります。」とのことで、実は驚いてしまいました。注水姿勢の取り方などの身のこなしから、鍛錬を重ねられていることがうかがえました。

 火災は予防が一番ですが、万一起きてしまった場合、あわてずに被害を収められるように、今後も訓練していきたいと思えます。



足立消防署林田署長と「一日消防署長」を委嘱された江連地域文化課長